（撮影：谷川和親）

とこなめ陶の森 資料館・陶芸研究所 合同企画展

沢田由治の目

YOSHIHARU SAWADA

はじめに

沢田由治氏（1909-1994）をご存知だろうか。平安時代末期から始まる常滑焼の歴史の解明、常滑の陶芸の発展、各地で開催された常滑焼の展覧会、多くの著作や講演を通して常滑焼の美術的評価を高めた人物は、沢田氏をおいて他にいない。沢田氏がこの世を去って四半世紀を経たが、加藤唐九郎氏や本多静雄氏らと交遊した話や沢田氏の筆による箱書きを目にする機会が多い。筆者は残念ながら直接お会いしたことがなく、沢田氏と親交のあった方々も少なくなってきている。そこで、本展覧会は沢田由治氏の多くの功績と常滑焼への情熱を改めて現代に問うことをその目的とする。

1 沢田由治（愛知県陶磁美術館にて）

沢田氏は明治 42 年、常滑の奥条で生まれた。ロクロ師であった清三郎（号集積庵）を父に、急須の名工と言われる初代山田常山の妹を母に生まれた。幼少の頃からやきものに慣れ親しんでおり、見よう見まねでロクロをひいて遊んでいたという。大正 9 年に常滑陶器学校のロクロ科に入学し、卒業後は薄端、火鉢、植木鉢などを制作して家業を手伝っている。戦中・戦後は市内の製陶所に土を供給するため日本酸器工業有限会社を取り仕切り、常滑の陶業界に尽力した。

古常滑（中世の常滑焼）の研究は小山冨士夫氏との出会いが発端であった。国文化財保護委員会の小山氏は中世から今日まで続く窯業地である備前、瀬戸、常滑、信楽、丹波、越前を「六古窯」と名付けた古陶磁研究家、あるいは陶芸家として著名である。常滑には昭和 5 年に訪れており、日本の陶磁史を明らかにする上で常滑焼の研究が欠かせないことを痛感し、昭和 27 年には常滑で講演会を開いている。

沢田氏は小山氏の講演を聴いて、「私は常滑の焼物師としての自負心から、これはどうしてもやらねばならないと、心中深く決意を固めた」と自伝『陶工・二十世紀』に言葉を綴っている。また、「私にとっては一生の恩人」とも語っており、その後の人生を決定づける出会いであったことも案ぜられる。講演会の終了後、沢田氏はすぐに小山氏の全面的な指導を受け、南山大学の中山英司氏、名古屋大学の山崎一雄氏、常滑高校の中沢三千夫氏らとともに「常滑古窯調査会」を発足させた。ここから生涯をかけた沢田氏による古常滑の研究が始まったのである。

「常滑古窯調査会」は知多半島に点在する古窯の分布調査と発掘調査を主とし、翌年の昭和 28 年に『陶説 7 号』に「古常滑窯址調査」を寄稿している。また、奥州平泉や鎌倉で常滑焼が出土したことを聞きつけると直ちに現地を訪れるなど、熱狂的な研究姿勢であったという。さらには、つくり手の視点とともに理化学的な検証を行うなど、一流の研究者と肩を並べて古常滑研究に没頭していった。

沢田氏の『世界陶磁全集・第二巻 平安ー室町の古常滑』（昭和 32 年）、『陶磁体系・7 常滑越前』（昭和 48 年）、『カラー日本のやきもの・常滑』（昭和 49 年）、

2 小山邸にて 小山冨士夫と沢田由治（昭和三十六年）
3 篭池古窯にて 右から2番目 小山冨士夫 右から3番目 沢田由治（昭和三十二年）

4 小山冨士夫記念賞 前列右から2番目（昭和五十九年）

5 高坂古窯にて 前列右 沢田由治 , 後列右から 2 番目 名古屋大学 澄田正一（昭和 28 年）
6 篭池古窯にて（昭和 31 年）
7 古常滑展にて灰釉秋草文壺をみる 右から 2 番目 谷川徹三 , 4 番目 小山冨士夫 , 左端 沢田由治（昭和 30 年）

「時代別古常滑名品図録』（昭和 49 年）、『日本のやきもの 3・常滑』（昭和 51 年）と続く一連の著述は、常滑焼研究を牽引しているという並々ならぬ自負心と自信に満ち溢れた「常滑焼の権威 沢田由治」を誕生させるに至った。そこには本人の性格もさることながら、常滑弁混じりの気迫ある語り口も功を奏していたのではないだろうか。ちなみに昭和 59 年 10 月の第 5 回小山冨士夫記念賞の褒賞受賞は、沢田氏にとってもさぞかし感慨深いものであっただろう。

昭和36年10月にスタートした常滑市立陶芸研究所（現とこなめ陶の森陶芸研究所）の開設にも尽力し、後には所長、顧問を歴任している。陶芸研究所では常滑焼や全国で活躍する陶芸家の展覧会の開催や、東京、名古屋を中心に陶芸展を行うなど、江崎一生（えざきいっせい）氏や三代山田常山氏をはじめとする常滑の陶芸家の育成に尽力している。1972年にフランスのバロリス国際陶芸展では常滑の陶芸家を出品させ、全員でグランプリを獲得している。他にも、愛知県犬山市 博物館明治村で本多静雄氏が席主を務めた茶会には常滑出身の陶芸家の茶碗を取り合わせた話や、東海地方の陶芸家による個展にも足繁く通い、独自の評価と歯に衣着せない言動で相手を翻弄した伝説は、今でも語り草となっている。

陶芸研究所に築窯された「常石窯（とこいしがま）」で陶芸研究所技術吏員らが作陶したやきものは昭和 38 年、東京の日本橋三越本店で常石窯作品展と題する展覧と販売を催している。その際に用いられた作品には、浅草寺の住職であった雲道人（うんどうにん）こと小林全鼎（ぜんてい）が刻んだ「常石窯」の落款が用いられている。その縁もあってか、今回の展覧会で重要な位置を占めている「常安（じょうあん）」こと沢田氏の箱書きに押された陶製の落款も雲道人が自刻している。この号「常安」は雲道人が名付け親であり、「あなたが、健在であれば、常滑は安泰である」という意味があり、沢田氏は生涯にわたって、雲道人の落款を常用とした。

8 陶芸研究所 2 階和室（昭和 51 年）
9 沢田由治と灰釉秋草文壺（陶芸研究所にて）
10 日本橋三越第一回常石窯作品展（昭和 38 年）
11 本多静雄夫妻と沢田由治
12 多くの出会い（左から谷川徹三、加藤唐九郎、沢田由治）
13 小林雲道人作「常安」陶印

今回の展示はとこなめ陶の森資料館と陶芸研究所の二館で開催し、常滑焼の名品とともに沢田氏が記した箱書きも同時に並べる企画展となっている。資料館では中世の常滑窯製品を展示し、陶芸研究所では近世から近現代を中心とする名工の作品を展示する。

古常滑は沢田氏が名付け親にもなっている三筋壺をはじめ、小山冨士夫氏から寄贈された広口壺（不識壺）、土味や姿・形が美しく、自然釉の景色が見事な山茶碗、類例の少ない常滑の水瓶などを展示する。近世以降は常滑の名工による作品を中心として、茶の湯に関連する水指や香合、煎茶器を代表する急須や酒器なども展示することで、多様な常滑焼に対する沢田氏の審美眼を楽しむことができる。

14　沢田由治作 タタラ茶碗（昭和 30 年）

また、あまり知られていないが、沢田氏は一日一作を目標に掲げ、仕事の合間をぬって茶碗や花器などを残している。写真 14 はいわゆる志野茶碗ではあるが、板状の粘土であるタタラでつくられている。明治の常滑人らしい豪快なつくりであり、如何にも本人を偲ぶに相応しい茶碗である。箱書きには本人の字でタタラ茶碗とあり、裏には昭和 30 年作とある。手取りも口触りも良く、いつも傍に置いて茶を楽しんでいたと伝わっており、納得の出来栄えであったのだろう。

この展示にあたって、箱書きから見えてくる沢田氏による常滑焼へのまなざしを伝えたい。筆者が伝え聞く「気骨のある明治人」「野人」「常滑の大久保彦左衛門」「選挙の神様」といった通り名は沢田氏の豪傑としての一面を表している。それは一本気な性格で、相手がどのような地位にあっても、物怖じせず、自分の主張を独自の言葉で伝え、他者を圧倒する大胆な人物であったといえよう。そして、常滑市立陶芸研究所顧問、日本陶磁協会理事、兵庫県陶芸館の相談役を務めるなど、古常滑から現代陶芸、さらには六古窯を超えて全国のやきものに対しても持論を展開している。それはユーモアに溢れた沢田氏の箱書きの文章表現にも表れている。それに対して、渥美窯で生産されたことが定説となりつつあった国宝の灰釉秋草文壺について、常滑で作られたものと頑として譲らない強い信念も持ち合わせている。そこには自伝の最初に登場する本人が揮毫した「白雲悠々」の言葉にあるとおり、流れる雲のように自由な心を持ち、時には自分を曲げない気骨な性格が端的に表れていよう。

15　沢田由治筆「白雲悠々」

おわりに

本展の作品の多くは市所蔵品及び寄託品である。また、沢田氏にお世話になった市民から借用して成り立っている。詳細は差し控えるが、生前に親交のあった方々から「由治さんと君が出会っていたらどんなに幸せだったろう」、「自分は由治さんの弟子だから教わったことを君に伝えたい」というエピソード付きで常滑の名品が沢田氏の箱書きとともに里帰りしているのである。その言葉を聞くにつれ、沢田氏が、そのつくりあげた縁とともに今も人々の心のなかで健在ぶりを発揮しているように感じるのである。

（とこなめ陶の森 小栗康寛）

中世

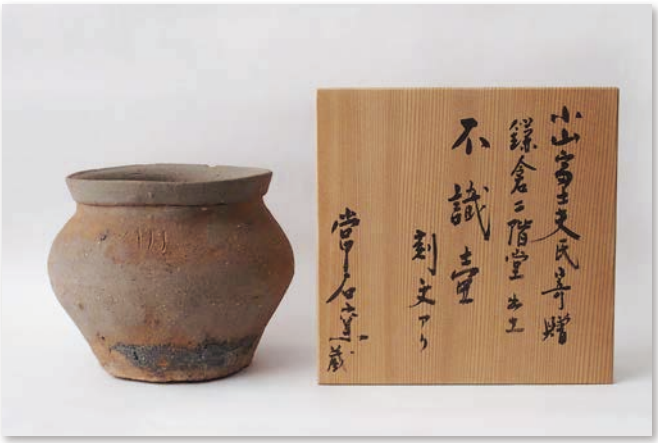
平安時代末期 自然釉三筋壺

平安時代末期 刻文壺

平安時代末期 自然釉水注

平安時代末期 長頸壺

鎌倉時代 山茶碗



室町時代 小山冨士夫旧蔵刻文広口壺（不識壺）

近世

江戸時代初期 自然釉お歯黒壺

江戸時代中期 初代赤井陶然 手付菓子器

江戸時代後期 上村白鷗作 不識水指

江戸時代末期 初代松下三光作 亀香合

江戸時代末期 牡丹色絵舟徳利

江戸時代末期 祝儀徳利

近現代

明治時代中期 初代杉江寿門作 朱泥菊型茶壺

明治時代中期 三代赤井陶然 真焼茶壺

大正時代 初代山田常山作 吉原葭州刻
朱泥細字茶壺

大正時代 初代不識庵素三作 白泥押印急須

大正時代 井上楊南作 獅子香炉

大正～昭和時代 松本重信作 天目茶碗

常滑市生まれ。常滑陶器学校（現在の常滑高校）卒業後、家業の製陶業を長兄とともに経営。戦時中、理化学用陶磁器の製造会社を設立して独立。かたわら焼き物の評論活動を続ける。51年4月、陶芸研究所、市への移管に伴い所長に就任。常滑市字奥条105。二男二女。67歳。

人600字点描

今の芸術は金目当て

沢田由治（常滑市立陶芸研究所長）

「私は、どうも、ひどいことを言う男って、評判らしくてね？」

のっけから、ゲサッと一本クギをさしておいて。

「今の世の中、経済が基盤。芸術家も、結局は金目当ての〝芸術家商売〟だわ。好きでやっているのなら、なぜ作品を売ったりするんだ」

「売れるものを作る。流行歌手と、どこが違う？　芸術の美名でごまかしてるだけでね」

しきりに両手が動く。そのたびに言葉が、いっそう鋭くなる。常滑焼だけにかけた生活。この自信に裏づけられた舌鋒（ぼう）。

「芸術とはね、人間技ではないこと、永久の生命を作ること。残念ながら、それがわかる人は、あまりおらん。あの加藤唐九郎にして、ようやく〝一つでも命が欲しい〟と言い出したくらいだ。まして、かけ出しの若い者がヒゲを伸ばして芸術家気取り。何だね、あれは」

言葉を区切るたびに、ギュッと口もとが引き締まる。目はランランと。若い人はたちまちすくみあがってしまいそう。

「いやねェ、口が悪いのも、所長を引き受けたのも、つまりは常滑焼の振興、発展。いや日本文化の発展を願ってのことですよ。私は九十歳まで生きることにしてる」

小さな毛穴からまで、情熱の火が噴き出してきそうだ。

「ただ、人生の完成期には、自分の土で自分の器をこねたい。その時は、自分のためだわ」

心底から常滑の土を愛す。

中部読売新聞　昭和51年10月26日付

とこなめ陶の森 資料館・陶芸研究所 合同企画展

沢田由治の目

開催期間　：2019年4月27日(土)～7月28日(日)
デザイン・印刷：cambrian design works
編集・発行　：とこなめ陶の森
〒479－0821 常滑市瀬木町4丁目203番地

－凡　例－

本パンフレットは、2019年4月27日～7月28日まで とこなめ陶の森 資料館・陶芸研究所で開催する合同企画展「沢田由治の目」のパンフレットです。本パンフレットの掲載作品は都合により展示されていない場合があります。

－協力者（敬称略）－

岩橋テル子，上神亮治，鯉江節子，佐藤博之，谷川和親，谷川平八郎
澤田實三，澤田亮三，澤井紀子，澤田治大　ほか親戚一同

YOSHIHARU SAWADA